

第三節 漁法

沖永良部島は、昔から農業の盛んな島であり漁業を専業とする者はいなかった。また、「海歩ウニアちガツテ家喰おろそれ倒ドオしや」と言つて漁の好きな者は肝心の家業を疎かにするので家運を衰退させるといふ戒めもあつて、いかなる釣り好きでも周囲に気兼ねなく、大手を振つて漁に行ける状況ではなかつた。したがつて、島の漁業は農業の片手間に行われる副業であつて、漁獲物も一家の食膳ぜんにぎわすにとどまり多くとれたときは縁故の者に分け与え、あるいは塩漬け、干物にして来るべき折目に備える程度であつた。

また、舟の夜釣りでは大物を釣り上げることも珍しくなかつたが、農耕の能率に影響することが甚だしいとして志ある農家はこれを嫌つて行わなかつた。

このため、沖釣りに対する島民の関心はきわめて薄く島の周辺漁場は他島の漁夫に委ねられていた。島の人た

ちが、そのとつた魚を売買するようになったのは近年に入つてからのことである。

一 瀬釣り

(一) 釣り竿と餌

瀬釣り（シーグワシ）は干潟で行うことは言うまでもないが、魚釣りといつても竿さえ持つて行けばいつでも魚が釣れるというものではない。潮時（シユウドウキ）といつて、潮が合わなければ魚はいくらいても餌えさには見向きもしない。月日、昼と夜、潮の干満、魚の種類によつても方法が異なる。したがつて漁をする人は常に潮時を念頭に置いている。一般に潮の満ち干の前後、潮の動いているときに魚は最も釣れる。

瀬釣りの対象は、昼はクサビ（ベラ類、スミチャ（ハタ類）、夜はフーミ（ハタンボ）、ニーバイ（シロブチハタ）、チルクチ（アカマツカサ）等である。

釣り竿は、近くのデーヤマ（竹山）から切り出した簡単なもので、シマデー（ほうらいちく）がよく用いられ

ていた。釣り竿のことをツルボーまたはチルボーというが、この名称の原義は「角棒^{ツルボウ}」であるらしく、釣り針が海底の岩に引っかかったときに、竹竿の先端に牛の角で外す装置を作って取り付けてあったのに由来するといわれる。

この仕掛けは、竹製のものもあったが現在は針金、陶器製のものがあり、チンシ（おおもんはた）釣りによく用いられている。

餌は、昼はセータナガ（川えびー池や川にすむ小さなえび）、やどかり、夜はウニマーミンザ（沙蚕^{ゴカイ}）、イヌジ（小だこ）を用いていた。また、近代の釣り竿、スプリングリールなどが普及する以前の昭和三十五年ごろまで、夜の大物釣りは鍾^{オモリ}のついた釣り糸を二〜三メートルの長さを持つて大きく振り回し、惰力をつけて目標の場所へ投げ込む方法で行われていた。そばに仲間がいるときはこの方法は危ないので、一人が釣り糸を振り回す間は五〜六メートル離れるか、低くしゃがみ込んで釣り針に引っ掛けられないようにしていた。

なお、目標地点へ投げ入れるには熟練を要し、初めのうちは振り回す糸を手離す角度によって、目標地点とは

全く逆の陸地側へ投げることもあった。

釣り糸も二十号以上の太いものを用いるため釣り針が底の岩に引っ掛ったときが大変で、糸を切るため自分の銅体に二〜三回巻きつけ、全体重をかけて引っ張るものであった。糸が太くて一人で切れないときは他の仲間の加勢をもらうこともある。またこの投げ釣りは、足場が比較的平坦^{へいたん}で広い砂浜や岩場で行われていた。

沖永良部で初めて釣り具店を開き、十四歳のときから毎日海釣りをしたと言う山口入武氏（和泊宇、明治四十四年生）は釣りの秘決を次のように語った。

魚は習性として動く餌に食いつく。釣り糸を投げただけ、垂らしただけでは魚は釣れない。餌が生きているように少しずつ、ゆっくり上下左右に動かす、そして、餌も魚が食いつきやすいように取り付けることが肝心であると。

山口さんは、そのような感覚で常に工夫していたのでいつも人の何倍か多く釣っていたという。

また、当時は魚を食べようと思えば自分で釣る以外、方法がなかったので釣り人も多かったそうである。幼いころから友達三人でいつも海へ行き、朝の八時から午後三時ごろまで瀬の沖へ泳ぎ出て釣りをした。釣れる魚は、

いう。

(二) ハチテグワシ（弾き釣り）

これは碇^{いかり}型の釣り針を用い、餌に寄り集まってくる魚を引っ掛ける。釣り針も現在は専用のものがあるが昭和二十年代までは普通の釣り針を四本背中合わせに糸で縛って使っていた。

餌は、船底などに生えるオーヌイ（青のり）、タクヌマダ（たこ墨^{すみ}）を用いる。昔はこの墨は冷やし薬として使っていたので捨てることなく蓄えておくならわしであった。その古くなったものを半焼きにしてから御飯粒と練り合わせて用いた。現在はさんがよく用いられている。餌は釣針の二〜三センチメートル上に付ける。対象はモーハニ（あいこ）、フスク（にぎざだい）などであり、シクヌクワが浅瀬に寄ってきた後、五月から夏にかけてこの釣りがよく行われる。

(三) 招き釣り

瀬穴に住む魚をおびき出して釣る漁法で、国頭方面ではこの方法でよく鰻^{うなぎ}釣りをしている。その方法として

スミチヤ、タアマタクサビなどであったが、アツミ（釣った魚を通して持ち運ぶ「浮き」のついた長さ二〜三尋^{ひろ}の紐）に一尋半も魚が連なるほど釣った。

釣った魚は売ったり（一斤十銭）隣近所へ分け与えたり、あるいは干物にして蓄えた。ひもじくなったら餌のムツルビ（いそはぜ）や釣った魚を食べたものである。

数時間もウイジクサビ（泳ぎ釣り）をすると足の裏は白くなり鱗^{うろこ}に追われたこともある。またある日、泳ぎ釣りをしている突然波に巻き込まれ友達三人、苦闘の末ようやく岸に泳ぎ着き命拾いしたこともある。長く泳ぎ釣りをした後はナガシチの浜の黒石のたまり水（太陽熱で四十〜五十度あった）で身体についた塩分を洗い落とし（シューハガシ）たものである。

市来武義氏（瀬名字明治四十三年生）によると昭和二十八年ごろまで、瀬名の手間川^{てまがわ}山に和泊の木之下藤園（別名、ミミチヤーヂヤ）という磯釣りの名人が住んでいた。木之下氏は、内喜名海岸に岩穴の入り口を石垣で囲った簡易な住まいを造り、昼は貝採り、夜は釣りをして暮らしていた。多くとれたときは魚を持って瀬名字に行き、米や唐芋^{かぶ}と物々交換をしたり、現金で販売をしていたと

は、二尺くらいの長さの竹を割って腐ったところ(においを出すため)の手を挟んで強く縛り、鰻に奪い取られないようにしたものを用いる。これを岩穴の口にのぞかせると鰻が頭を出してくる。このとき、別に用意しておいた釣り針のついた竹棒で釣り上げる。釣れてなかなか穴から引き出せないときは針金を口から差し込むと容易に引き出せる。

釣れた鰻は、クルミまたはアーバタ(目の色で呼び名が違う、黒目・クルミ、褐色眼・アーバタ)のほか、オーバタ、イチブル、ウズ等がおり十キログラム以上の大物を釣り上げることもある。餌も最近はさんまを使うことが多くなった。国頭方面ではおびき出す竹棒のことをヲウチグシという。

(四) フーミ(はたんぼ)釣り

フーミは大目の意である。夜釣りの代表的なもので七月から十二月ごろまで釣れる。方々に○○ガタマと称するフーミヌヤ(はたんぼの住家)があり、群れをなしているのでフーミ釣りの人はそこを目当てに行く。ミチャガイジュウ(潮の満ち始め)のときに魚が勇み最も

よく釣れる。早釣りの上手な人は百匹余りも釣り、「ティルヌ、ウブサナタン(魚かごが重くなった)」と言ったものである。

釣り竿は、三尋ぐらいの長く細いもの、テグスもできるだけ細いものがよく三〜五本の枝針の付いたものを用いる。

餌は、ウニマールミンザ(沙蚕)、アマム(やどかり)、さんま等を用いていたが、最近では鯖の皮の餌をつけた五本枝針が釣り具店で売られており、餌を用意する必要はなくなった。

フーミ魚は味のよいことでは小魚中一等といわれ、煮付けにしても、だしにしても最良である。ことに秋に入ってからフーミ魚は脂がのって美味である。

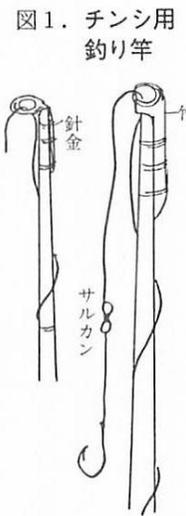
(五) チンシ(おもんはた)釣り

めばるの幼名で、沖瀬の岩の割れ目の波が一〜二尋の落差で白泡を立てながら上下する場所を釣る。

釣り竿は、普通のものとは違い、やや太めのものを用いるが先端部には円い竹輪か、針金の輪を取り付け、これに糸を通す。これは釣り針が海底の岩に引っ掛かった

ときに、釣り糸をたどって突き離れたための仕掛けである。釣り糸にはヒシ(鍾)を付けず波の流れに任せる。同じ場所ではせいぜい二匹程度しか釣れないので、次々と場所を移動する。

餌は、ハチチャ(ふとゆびしやこ)、ムツツルビ(いそはぜ)を用いるが、ハチチャは褐色になったものがよいといわれ、釣りに行く前に煮たり、あぶったりして持つて行く。



(六) イビケワシ(伊勢えび釣り)

やみ夜の干潮時に深い割れ目で釣る。釣るといってもえびの胴体をついて掛ける漁法である。この方法は古くから行われていたが専用の釣り針はなく、古くなった傘の骨を三本、錠状に曲げて用いていた。昭和の初めになって普通の釣り針が島内に出回ってからは、単針また

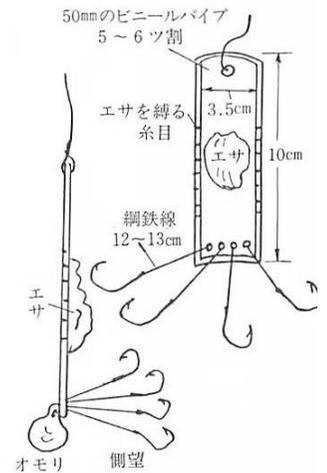
は二本背中合わせに縛った釣り針が用いられたが、いずれもえびが餌に食いついたとき、一〜三本の針でえびの足の関節膜を引っかけなければならなかったため、一晩に二〜三匹釣ればよい方であった。

えび釣りは沖永良部以外では見られず、したがって釣り具も製品化されていなかったため、えび釣りをする人はおもしろい釣りに釣り針を工夫していたようである。

村山忠茂氏(手々知名字、大正十二年生)は種々思案の末、昭和四十三年に図のような釣り針を考案し、えび釣りを容易にした。えび釣りのだご味はまた格別で、体験した人でないとその心境は分からないが魚釣りの数倍の楽しみがある。つまり釣り糸を垂れていると、えびが前足で餌に触れるのが「チクツ、チクツ」と伝わってくる。それから一〜二分すると餌をグイッと抱き寄せて食いつくのが伝わってくる。このとき、一気に胴体をついて掛けて釣り上げるのであるが海底のえびの動作を想像しながらの釣りは最高の楽しみがある。釣り上げる途中、えびを岩礁に触れさせるとがっちりとして岩に抱き付いて釣り上げることができない。

釣り竿は太めのものを用い、リールも大鼓リールの方

図2. 村山式えび釣り具



が良く、餌はさんまを用いる。村山式釣り針が開発されてからは一晩に五〜六匹、多いときは十匹を超えることもあったが、最近ではえびが減り、釣る人も少なくなった。

また、国頭方面では昭和四十年代後半まで、釣ったえびのほとんどをわら縄で胴体を縛って海につないでおき、お祝や珍客の来訪に備えたものである。つないでおくと遠くへ動けないのでよく肥えるそうである。

(七) ウチへ(投げ置き釣り)

二十キログラム以上の大物が対象で、釣り糸も百号以上のナイロンやロープ、先糸もワイヤーを用いる。餌は、室鰯や飛魚を一匹掛けする。



1. ウチへの大物 (42.5kg)

和泊港の突堤が主な釣り場で竿を利用して投げける場合と手で直接投げける場合がある。まず、魚屋から魚の臓物や骨などをもらい集めて網袋に入れ、毎日同じ時刻に突堤にひもでつるして魚をおびき寄せる。(一種のまき餌で、これをハブシという)。そこへ釣り糸を投げておくのである。二十キロ以上の魚になると相当強く引くので、魚に引き込まれないよう注意が必要である。釣り糸も二百メートル以上用意し、元は固定物に結び付けておく。魚と一時間以上格闘することもある。

昭和四十年代以降、最大百キログラムを含む三十キログラム以上の大物が三十〜四十四匹は上がっており、最近では昭和五十七年十月の伊集院博明氏の四十二・五キロの記録が残っている。

二 舟釣り

舟釣りのことを「ナガリ」ともいう。「流れる」の意であるから、舟を定着することなく、潮流に任せて流しながら釣った漁法による名称であろう。

沖永良部での舟釣りは明治時代から行われていたが、鱒突きとイジヤイユ(すみあき)釣りが主体で、釣った魚もほとんど自家用であった。これは島の漁業が食膳をにぎわす道楽的なものであったこと、イユウトウイヒニ(島舟)で舟足が重く、しかも、のんびりとした槽こぎであったことにも基因したものと思われる。

大正に入ってから糸満の漁師が来島してからは、漁舟も沖縄から「ウバ」と称する舟足の速いものが導入され、続いて大島から「アイノコ舟」(イユウトウイヒニとウバの中間的なもの)が導入され、漁法も糸満人に倣って飛魚、ムナジ(室鰯)、ヒチ網(雀鯛)や近代的な一本釣り漁業も行うようになった。また、舟釣りは風と密接な関係がある。朝、家を出るときにベタナギ(海が油を流したようにないでいること)であっても急に風向きが

変わり、風が吹き荒れて大雨になり、視界がきかなくなつて慌てることがある。これを「ハザモイ」という。「ヤグニヤ(田皆岬)にグルグムヌ(黒雲が)カーユンキニヤ(懸かったら) スグムドウリ(すく引き返せ)」という言葉があるとおり、特に夏の海は天候が変わりやすく、漁師は常に雲行きを見て、天気を判断し、漁に出たものである。現代はテレビ、ラジオの天気予報と各自気圧計を常備しており、昔のように勘だけに頼ることは少なくなった。

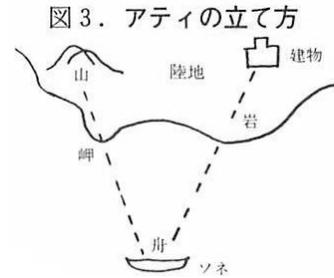
しかし、長年海で体験した勘は鋭く、現在でも重宝がられ一般の人がよく漁師に「どこそこへ行ってきたいが天気はどうだろうか」などと尋ねることがあるが、「何時ごろまで帰って来ないと天気が崩れる」などと言い、それが的中することが多い。また、舟釣りは、ただ沖へ舟を出して、釣り糸を下ろせば、どこでも魚が釣れるというものではない。時期や場所・潮時、魚の種類によつて釣り方が違うのはもちろんであるが、魚も人間同様に住む場所(家)をもっている。すなわちそれが「ソネ」である。

本島周辺には大小無数のソネがある。漁師たちはこの

ソネを何か所も覚えており、どのソネでは、どんな魚が釣れるとか、この潮ならどのソネに行った方が良いかを決めて行くのである。大きなソネは大抵これを発見した人の名前をつけて「〇〇ソネ」と言っているが、住んでいる魚の名をとって〇〇ヤー(ソネ)とも言っている。

ソネの所在は、勘だけで探し当てることは難しいので「アテイ」といって、いつでもその場所へ行けるように目当て、目印を立てるのである。

その方法は、一つの方向に不動の物、例えば山、建物などを見つけ、それと手前の岬の先端などを見通し、どの位置でどういう具合に見



えるかを覚えておき、さらに別の方向に一〜二カ所同じ方法で「アテイ」を立てておいて舟の位置と一致したところが目標のソネである。しかし、潮は常に動いているので、碇を下ろし釣り糸を垂れても、ソネを外れ、魚が

全く当たらない場合がある。潮があつちこつちに流れることを「ヤブリジュウ」と言い、魚も釣れないので漁師はこれを大変嫌う。

また、魚には移動性のものと、その地に住みついているものがある。住みついている魚を「ジイヌイユウ」と言い、海底に対して水面近くにいる魚を「ウキユウ」と言う。

舟釣りに出て怖いものはフカ(鱧)の出現だという。鱧を突いて血が流れたときに群れをなして現れ、舟底にゴツンゴツンと当たったり、舟体に身体を寄り添うことがある。そんなときは次のようにして追い払うそうである。

「グジャ(鯨) 鰐鮫(鯨鮫)の意 イーヌチジユマチ(西の竜巻) イチヨチタボンナ(行き合わせて賜るな)」と言いなながら包丁で舟縁を叩いたという。(和泊字種子田三千世氏談、また、畦布字宮村池利氏(明治二十七年生)は、鯨の危害を恐れてその呼び名すらクジラとは言わずフーチユ(大人の意)と言っていたという。鯨は遠くから「ドン」という音が、ヒトウ(海豚)はブープーという音が聞こえるが、音が聞こえるとフーチユ、ヒナダマ

(自分の舟の意) ウトウイジャシ(音を出せ)といつて石で舟縁を叩いた。そうすると鯨、ヒトウは舟に近づくことなく遠くへ去ったものだという。

また、氏はこれにまつわる次の話もした。

出花のある人が、鯨が現れたのを見て、「アガヌムンサシミ シイ カマガ(あいつめ、刺身にして食べようか)」と言ったら鯨に舟を沖の遠方へ持つて行かれ、どうしようかと考えぬいた末、鯨がくわえて引いている縄を包丁でそと切つて逃げ帰つたが、浅瀬にきて櫓を岩に引っかけて折つてしまったという。



2. 長浜(昭和35年ごろ)



3. 手漕ぎ舟(和泊海岸 大正12年ごろ)

だから海では「シユジ ナ ムニ ガーインナ(種々な言葉を言うな)」といつて鯨、鱧などを大変恐れていたものである。

(一) ソーライチヂ(鱧)突き漁

これは突き漁の一種であるが舟で行うので舟釣りのところで述べる。舟を鱧の回遊する沖合いまでこぎ出し、飛び魚に似たチチ(疑似餌)を長さ一丈ほどの釣り竿のごとき竹につり、海面をスースーと滑走させて鱧をおびき寄せ、浮上してきたところを「ヤツティムン」または「ソーライチヂヤ」という大きな鉞で突くのである。鱧の刺身は特別重宝がられる。

鱧は浮き魚で、潮流に関係なく風上から風下へ泳ぐものであるから、チチ(疑似餌)も風上から風下に向けてスツスツスツ、タンタンタン、スーッとあたかも飛魚が遊ぶするように引くのである。鱧は餌の尾をねらつて追うので餌を風上に向けて引いてはいけない。

餌に食いつこうとする鱧は十メートルくらい先から身をくねらせ、青びかりして来るのですぐ分かるが、餌木の頭を向けると逃げて二度と来ないという。

舟は潮流に任せて流すのであるが、四キロメートルほど流れたら元の位置へ舟をこぎ返し、また同じ事を繰り返す。

漁期は三〜十月で五〜六月が最盛期である。潮はチツクミジユウで、しかも太陽が地平線から昇る時刻が最もよい。この漁法は昭和三十五年ごろまで行われたが、現在は動力舟でホロ（疑似餌に釣り針の付いたもの）を引く釣り漁法に変わっている。

鱈漁に用いる道具は次のとおりである。

1 チチ（疑似餌）

鱈をおびき寄せるのに用いるもので、牛の角と木目のよいハバシニヤ（くさぎ）や杉の木で飛魚に似せて作るが、その良し悪しが漁獲に大きく影響するとあつて漁をする人は優れた疑似餌を作ろうと苦心したようである。疑似餌は数個作るがその中、鱈が食い付くほど優秀な疑似餌は一〜二個にすぎず、これは秘蔵して他人に見せなかつたそうである。

2 ヤッティムン（銚）またはソーライチチャ（銚）

大きな三本銚でかじ屋で造り、長さ三メートルほどの檜の丸棒をつけてある。この銚は獲物に突き刺さると同



▲6. 取れたえもの（鱈）



▲4. おびき寄せる



◀5. 突く構え（突く寸前）

鱈突き油（ソーライビチ）

図4. 疑似餌（チチ）

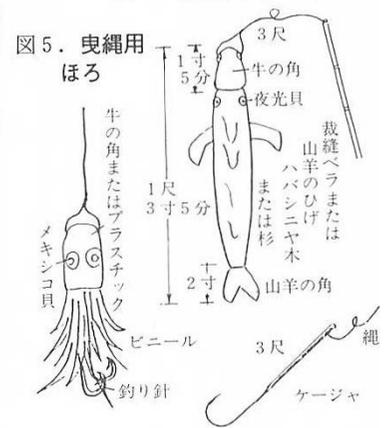


図5. 曳縄用ほろ

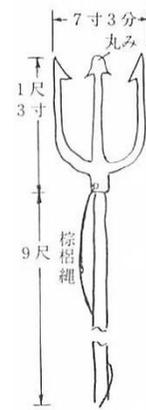


図6. 銚（ヤッティム）

時に柄から抜ける仕掛けになっているが、銚には百尋くらいの棕櫚繩が結んであり、魚は重い銚を引いて逃げ回るうちに疲れて浮かび上がるのである。

三本のうち、中のは先が丸みを帯びているが、これは鱈を突き刺したときに背骨を折るためだという。

3 ケージャ（かぎ）

舟のそばまで引き寄せた魚を引っかけて舟に取り入れ

る道具で、鱈だけでなく他の漁でも用いる。ケージャは魚を引っかけてから海に引き込まれる場合があるので舟体と縄で結んである。

(二) イジヤユ（すみやき釣り）

鱈漁と並んで最も古くから行われていた一本釣り漁で、普通フカノウ（深縄）またはナガリともいう。

漁は二〜三人の間組みで行くが漁具は各自持ちである。ノウ（縄）は、ウイノウ（上縄）、ナーノウ（中縄）、シャーノウ（下縄）とだんだん細くなっている。（上縄は三十一オーシの三本編み、中縄は二十一オーシの三本編み、下縄は七オーシの三本編み）。これは海底の岩に絡んだときに縄を切りやすくするためと、縄の損失を最少限に止めるためである。

釣り縄は、木綿糸を原料とし、三つ編みにしてから豚の血で染めて蒸し硬くして用いていた。これは縄を長持ちさせることと、漁中に糸のもつれを防ぐねらいもあったようである。当時は学校の校庭や道路などで糸を引っ張って縄を編んだり、血で染めた縄をピーンと張って乾かしている光景をよく見かけたものである。

釣り針は、もつれを防ぐため次図のごとく三角状の針金の先にテグスで取りつける。従来は釣り針二〜三本の連結であったが、深くなるほど魚の層が広がるので現在では七〜八本が普通である。

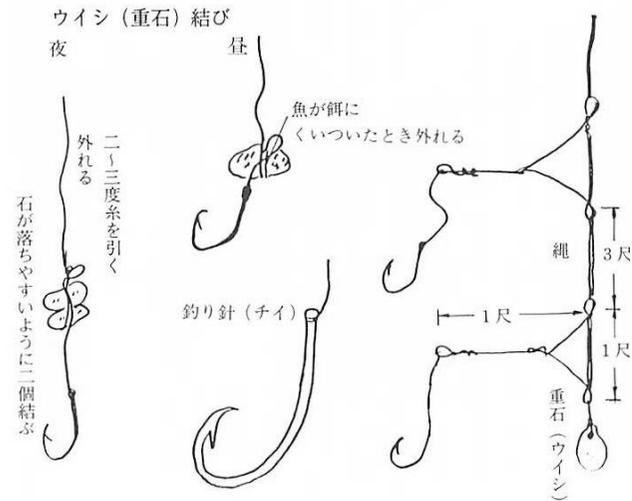
釣り針を海底に下ろすには、ウイシ（重石）といって拳大の丸い小石をその都度釣り縄に結んで投げ入れ、海底に届いたときその釣り縄を引いて石を落下させる。

ウイシ（重石）は、潮の流れや深さによってその大きさが違い、またその結び方も昼と夜では違う。昼は魚が餌に食いついたら結びが外れるように、夜は二〜三度糸を引いたら外れるような結び方をする。また外れやすくするため「ワシ」をくるといつて五〜六メートル糸に遊びを持たせることもある。ウイシ（重石）としては伊延や西原侯の黒石が重宝がられていた。

碇として石をわら縄で結んで使用した。それは石が海底の岩に引っ掛かったとき、切れやすくするためである。この碇の上げ下ろしは重労働で、間組で行くときは年齢の若い者、あるいは見習いの者の役目であった。餌は、魚の刺身、たこなどであったが、長い時化の後は入手困難な場合が多く、八方手を尽くしてもなお得ら

れないときは無手のまま出漁し、たいまつをたいて飛魚をおびき寄せ、これを網ですくい取って用いた。しかし、この方法は失敗することも少なくないので、そのときは「餌立て」と称して他舟に行つて分けてもらうこともある。

図7. フカノー（深縄）

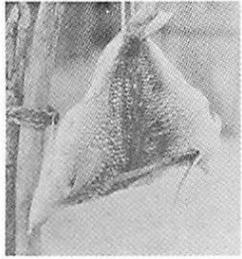


昔は、釣り針に餌を縛るのはアダナシ（アダンの気根）を使っていた。

(三) ヨーヌイユ（ついで）釣

ヒューヌイユはウキユウ（浮き魚）で沖合いに群れをなしており、バチャバチャ波しぶきを立てて跳ね上がるので、その所在は遠くからでも容易に発見できる。

跳ね上がる群れを発見すると数隻の舟が、われ先にと現場へ急行して釣り上げるのである。魚はハブシ（まき餌）をすると他へ移動することもなく同じ場所、しかも、二〜三尋の糸でも釣ることができる。釣りに夢中のあまり舟が接近しすぎて投げた釣り糸が他の舟に引っ掛かることがあるが、このときには「糸を外してくれ」と頼まれても外してやる余裕がないほど次から次へと釣れたという。



7. 魚を干す

餌は、カンシュ（蛤）の実がいちばんよく、磯砂を掘ると三十〜五十個はすぐ取れたが、他にえび、たこを用いた。貝の実は二

〜三個釣り針に掛け、ワラシビ（稲穂の茎で縛りつける。釣れた魚は、漁の帰りを待つ仲間の家族とともに浜で煮て食べ、残り之家へ持ち帰ったそうである。当時は魚を扱う人もなく、干物にして蓄えたものである。

畦布、三島浅秀氏（明治二十八年生）談

(四) 鯉釣り

この漁は舟が動力化されてから行われるようになった。ヒコキと言って飛行機に似た流線形の木製の漁具（)を舟で引いて波しぶきを立て、鯉をおびき寄せる。昭和三十五年に手々知名の長尾重三氏がはじめて導入し、大いに釣りまくったという。

当時この道具は秘蔵のもので、長い間人にも見せなかつたという。なぜ、波しぶきに鯉が寄って来るかは小魚が群れて泳ぐ音によく似ているからだと言われている。

漁期は四〜十月で、潮に関係なく五〜六本の疑似餌を引いて舟を走らせて釣る。鱒の時間には、舟の両側に竿棒を出して鱒のホロを引き、後に鯉の疑似餌を引く。晴れた日よりも曇った日がよく釣れる。

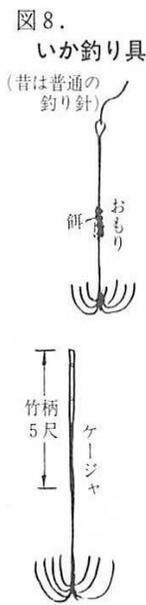
(五) 烏賊釣り

烏賊引きは、あおり烏賊が対象で一〜五月の月夜にリーフのすぐ沖合いで行われる。たこの疑似餌をニメートル間隔で二〜三本取りつけ、トロリング（舟を走らせながら）で釣る。五〜六キログラムの大物もおり、多いときは一晩に十数匹釣り上げることがある。クリクリして味が良く刺身、煮付けともに最良である。

(六) 烏賊釣り

イチヤクワシ、すなわち烏賊漁はやり烏賊（赤烏賊ともいう）が対象で、元来は糸満漁夫の間に行われていた漁であるが大正の初期、糸満舟（ウバ）が使われてから島でも行われるようになった。

漁期は八〜九月、舟が手こぎのころは夕方早く舟を出して沖合い数キロメートルの漁場に着き、翌未明に帰港



したものである。現在は夕方七時ごろ舟を出して、夜の十一時ごろ帰港する。

漁は、ナガリといって舟を潮の流れに任せながら照明（昔はたいまつ、次にカーバイト、現在は電灯）をとまずと烏賊は明かりを見て舟の周りに寄って来る。初めは三十尋くらいの深さに糸を下ろす。イカを釣り上げると共食いして他の烏賊もだんだん上の方に浮き上がって来る。水面近くまで群れがきたら釣れた烏賊を餌にかけて投げ入れ、共食いさせてこれを引き寄せ、別のゲージヤ（かぎ）で後ろから順に引っ掛けて舟へ取り入れる。

(七) 延縄漁

沖合い一〜二キロメートルの水深百メートル以上の海底に釣り糸を下ろして釣る。長さ百メートルほどの延縄に百二十本ほどの枝針をつけたものを二本持ち歩き、下ろして二時間くらいいたら一本の道具を引き上げて魚をとり餌を取りつけて再び下ろす。下ろし終わったらもう一方の道具を引き上げるのである。

漁期は年間を通してよく、雑魚、めばる、マチ、ソージ等が対象である。

三 突き漁

突き漁は、昼夜に関係なく行われるが干潮時に瀬で行うものと、潮の満ち干に関係なく水中に潜って行う方法がある。干潮時に磯で行うものは雑魚が対象で、主として夜のイザリ（たいまつをたいて岩間に寝ている魚をとる漁）で大潮の多い冬場に行われる。

これには長さ二尋ほどの竹柄のついた小さなイチジャ（銚）を用いる。モーハニ（あいこ）、シーガイ（テナガダコ）等がとれる。

(一) 潜り漁（潜り突き）

泳ぎながら水中眼鏡で海中をのぞき、銚で魚を突く漁である。昔の銚は傘の骨で作った小さな一本もので大きな魚を取ることができず、フスク、ムティナ、シチ、オーバチ等の小魚であった。

大きな針金が島で販売されるようになってからは銚も大きくなり、柄も三〜四尋のものになった。

銚が遠く、速く飛ぶように銚の根元にチューブのゴム

を取り付けたら、また魚に突き刺さった瞬間、銚先が外れる仕掛けのものなどが広く利用されるようになった。

また、昭和四十年ごろから潜水用のウェットスーツが出回り、真冬でも容易に漁ができるようになった。潜り突きは各自が銚を持って漁し、それぞれアツミ（とった魚を通して持ち運ぶ浮きの付いた五〜六尋の細いひも）を携えるのが普通であるが、ティル持ち（ひも）といって漁の上手な人について専らその魚を運ぶ人もいた。

大栄健二氏（国頭宇、昭和三年生）によると、突き漁はゆっくり動くことが大事であるが昔は潜るために手足をバタバタさせていたが現在はスーツを着て七〜八キログラムの鍾バンドを着けているので、その重みで静かに潜ることができる。静かに潜って岩をつかみ魚を待ち伏せする。十五尋くらいは潜れるという。

突くときは魚の急所、目の後の脳髓を一突きすることが肝心で、そうすれば五十〜六十キロの大物でも容易に仕留めることができる。その他、甲烏賊、夜光貝、たこもよく取れる。海底の岩穴のたこを突いて一潜りで取り出せないときは二〜三回潜るが、それでも取り出せないときは石を探ってきて岩を割って中のたこを取ること

あつた。

突き漁は、潮の流れに乗って一日に五〜六時間泳ぐこ

ともある。



8. 焚火で暖をとる

しかし、スーツのなかつた時代の冬の漁は寒く、寒さで足がしびれるので、これを目安に陸に上がり、焚火で暖をとってから再び漁を続けたものである。

四 網 漁

網漁には、又手網、えび網、建網、投げ網、追い込み網、飛魚刺網、待網がある。

これらの網は木綿糸がほとんどであったが、中には芭蕉や麻で編んだものもあった。また、網は個人または仲間同志で編み、補強のため豚の血で染めることもあった。

網のアシ（錘）には、クルシビ（寶貝）の背中突起した部分を削り割って用いた。

(一) 又手網

芭蕉布を荒目に編んで作るのが一般的であるが、アンペラ（麻袋）で作ることもあった。四〜五尺の網で裾は袋状になっており五〜六尺の竹の柄がついている。主に女性が用い、初夏から秋口までの昼間、瀬だまりにいる小魚をすくう。ミチャガイ（潮の満ち始め）のときは魚が餌を求めて波に乗り、フムイ（水たまり）に上ってくるので、波がフムイに押し上がると同時にサディ網で入り口をふさいですくう。ことに、毒流し漁には不可欠の漁具であった。

また、シクヌクワをすくうためにチニルという漁具があった。これはチニルハジラで作ったかごで、このかごを両手で押さえ、海草や石の間を両手でかき寄せるとシクヌクワが穴と間違えてチニルに逃げ込んだところをすくい上げる。いずれも昭和三十五年ごろまで行われていた。

(二) えび網

イビ網、ゴ一網ともいい、サラチ（さるかけみかん）の茎で直径二尺くらいの輪を作り、それに網をゆるく張って沖瀬の岩礁の割れ目に仕掛けてえびをとる方法と、木綿糸で四ツ指し（指二本を合わせた広さの編板で編んだ目）の網を編んで二メートルほどの長さに仕上げ、えびの通りそうな瀬に仕掛けてえびを引っ掛ける方法がある。

漁期は、四〜八月ごろまでの間であるが梅雨期は特に多くとれる。仕掛ける場所はほぼ一定しており、ゴ一網は固定したままであるが、建網は昼の干潮時に張って翌



9. 突き漁のえもの



10. サディ網



12. チニル



11. ワラグチ（海わらじ）



13. 伊勢えび

図 8. ゴ一網

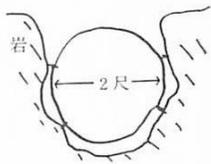


図 9. えびかご

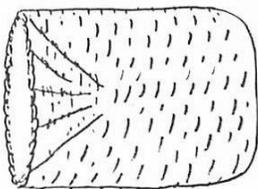
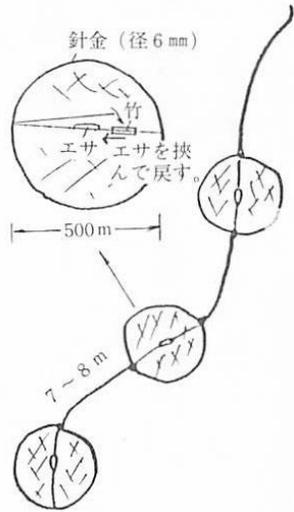


図15. 旭がに掛かり網



13. 投げ網を投げた瞬間



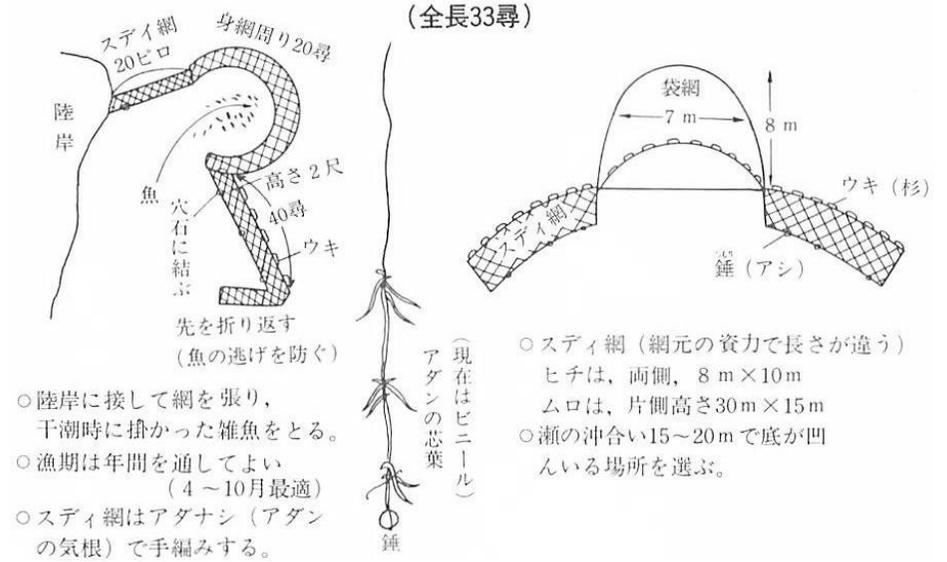
14. 投げ網で取れた魚

水深二十〜八十メートルの海底の砂地に住む旭がにをとる漁で、直径五十センチの輪網を作り、中心部に餌をつけて海底に沈める。輪網は七〜八メートルごとに連なっておりその数は百個にも及ぶ。
網は下ろしてから一時間くらいして引き上げるが、一網に十匹も掛かることがあるという。沖永良部では昭和三十年ごろから行われている。

(七) 旭がに掛かり網

べて尾をバチャバチャさせているところへ投げ網する。波に乗って来る魚は素人にはなかなか見えないが、熟練者にはすぐ分かる。漁師の着物なども、白色など目立つものはよくない。一度網を投げると魚が四散するので同じ場所では投げ網することはできない。それで次から次へと場所を移動する。漁期は春から夏で、モーハニ、ニルムシが主であるが、時には一〜二キログラムのシチをとることもある。(手々知名、村山 晃氏談)

図14. 待ち網 図13. 追い込み網 図12. ヒチ網, ム口網



- 陸岸に接して網を張り、干潮時に掛かった雄魚をとる。
- 漁期は年間を通してよい (4〜10月最適)
- スティ網はアダナシ (アダンの気根) で手編みする。

(六) 投げ網

潮の満ち上がり時に、沖の瀬またはなぎさで波に乗って来る小魚を直径六メートルほどの円い網を投げかぶせてとる漁法である。魚の上がつてきそうな平坦な瀬を選び(凹凸のある所は網が瀬に密着しないため魚が逃げる)腰をかがめて波に乗って来る魚を待ち伏せし、海草を食んだ三十三尋の縄を水中で上下させながら行う。アダンの芯葉は水中でキラキラ光って魚を脅かす効果がある。アダナ葉は一日しか使えないので出漁のたびに採取したが、これは大変な作業であったという。
しかもアダンは、防風用に植えたものである。芯を抜き取られると成長が止まるので、どこからでも勝手に取ることはできず、いちいち地主と相談しなければならなかった。そのためビローの葉が用いられたこともある。昭和三十年代に入ってビニール袋入りの肥料が島で使われるようになってからはその袋を細長く切って用いるようになった。取れた魚の分配は、昭和三十年ごろまでは飛魚漁と同じく階級による方法であったが現在は平等分配である。